

国語科教育と日本語文化研究（Ⅲ）

—「日本語学入門」における国語科教員基礎学力の扱いを中心に—

A Study of Relations between Secondary School Japanese Language Teaching and Japanese Language and Culture Study (Ⅲ)

— Through Dealing with Basic Learning Abilities of Japanese Language Teachers in
Introduction to Japanese Language Study —

戸 田 利 彦

Toshihiko TODA

キーワード：国語科教員基礎学力・「日本語学入門」・「日本語研究Ⅰ」・「気」の表現と文化

I. はじめに—教職課程と「日本語学入門」—

本稿では、比治山大学言語文化学科日本語文化コースの新カリキュラム^{注1)}における〈日本語学〉の系統の授業科目として独自の目的を持つ「日本語学入門」^{注2)}を、学習指導要領にある“教科に関する科目”としての国語学に関する科目（主に現代語）に該当する科目として期待される役割に、どのように適合させうるかについての視座を得るために、国語科教員志望者の基礎学力の確認及び向上の方策のあり方を中心に考察することを目的とする。具体的には、現代の日本語に関しては、“現代日本語に関する身近な諸現象”及び“日本語に見る日本人の精神文化論的特徴”を主要なテーマとする学科共通科目「日本語学入門」の場合、“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と、対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）の“現代語の指標”にある“現代語の働きや特徴に関する基本的な知識”あるいは“現代語の文法的知識”を中心に、国語科教員になるための基礎学力をどのように扱いうるかについて、実践に基づきながら検討する。また、2016年前期に「日本語学入門」の授業を履修した教員志望者も含めて、1年後の「日本語研究Ⅰ」（新カリ2年次前期）の受講者を対象に実施された「基礎学力の確認及び向上の方策に関するアンケート調査」の結果の分析を通して、「日本語学入門」と「日本語研究Ⅰ」の接続のあり方について考察する。

「日本語学入門」（新カリ1年次前期）は、現代日本語を専門とする筆者と日本語史を専門とする教員の2名が担当する〈日本語学〉の系統（「専門基礎」系列）の授業科目である。2016年度のシラバスには、筆者の担当する現代の日本語に関しては、言語文化学科及び日本語文化コースのカリキュラム全体も視野に入れて、以下のような【概要】【教育目標との関連】が記述され、また【到達目標】が設定されている。

【概要】

現代の日本語に関する基本的な知識と、日本語を分析的に考察する視点を身につけます。現代の日本語の分野では、その状況に関する資料に基づき、語彙、文法、音声、表記、表現などの視点から専門に関する基本的な用語を理解すると共に、関連調査を行い、発表及び質疑応答を行います。

【教育目標との関連】

日本語文化コースの「専門基礎」系列の講義科目です。

また、関連している教育目標は次の通りです。

日本語による表現力を高め、適切なコミュニケーション能力を身につける

【到達目標】

- (1) 日本語学に関する基本用語を理解することができる
- (2) 日本語を分析的に考察する視点を持つことができる
- (3) 日本語と日本文化との基本的な関係について理解することができる
- (4) 日本語による高い表現力及びコミュニケーション能力を習得することができる

一方で、当授業科目は、言語文化学科日本語文化コースの教職課程（中・高一種免許（国語）／国語学（音声言語及び文章表現に関するものを含む。）に関する科目である。コース内で設定された“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と、対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）における本科目（教職必修以外）の、主として〈現代語〉としての位置付け・役割は、以下の通りである。

〈現代語〉

項目：教材研究・教材分析力／指導内容に関する領域／国語学に関する領域／現代語

現代語の指標：現代語の働きや特徴に関する基本的な知識を備えている／現代語の文法的知識を備えている

また、上記に加えて、参考として、中学校及び高等学校の学習指導要領の内容や教材が以下のよう示されている。

中学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【 】内は領域名：【読むこと】
【伝統的な】（音声・話し言葉と書き言葉，共通語と方言，敬語，世代間の使用差）（語句・語彙，単語・文・文章）

高等学校学習指導要領の内容や教材（参考）／記述の一部（例）【 】内は「国語総合」の領域名 【A／B】は「現代文A／B」「古典A／B」を表す：科目名「国語総合」【伝統的な】
P30～語句の構造（漢語の構成など），語彙の構造（和語・漢語・外来語），調査・分析・報告などの活動，漢字の音訓，言葉の使い分け／科目名「国語表現（現代文A／B）」【伝統的な】
P30～文・文章の組み立て・語句の意味，用法，表記，語彙，P34文化審議会答申「敬語の指針」
5種の敬語 【A／B】

「日本語学入門」（新カリ1年次前期）では、前述の【教育目標との関連】で示しているように、日本語による表現力を高め、適切なコミュニケーション能力を身につけることをあげている。したがって、講義科目ではあるが、発表資料を作成し、集団の前で発表したり質疑応答したりする中で、日本語を書き、話す力を養うと共に、グループ内で個人同士が話し合い、グループでまとめて発表し、他のグループの構成員と意見交換する中で、実用的なコミュニケーションの力を養うようにしている。また、【授業の到達目標】にある、(1)基本用語の理解，(2)分析的考察の視点の獲得，を達成するために、筆者が配布する現代の日本語に関する参考調査資料の要約という課題の中で、受講者自らが、資料に出てくる代表的な基本用語の解説を行い、併せて、資料の内容に関連する調査を行った上でその結果を報告することを求めている。さらに、本授業では、(3)日本語と日本文化との基本的な関係についての理解，を目指しており、その目標到達のため、現代日本語学のみならず、言語文化論的な要素を持たせている。具体的には、参考調査資料の記述内容とそれに関連して行ったグループ単位の調査結果に基づきながら、グループの構成員一人ひとりが、調査で扱われた現代

日本語の諸現象を中心に、日本語に見る日本人の対人意識、思考方法、感覚、美意識などの精神文化論的特徴についての気付きを、グループの発表資料中に文字化して言及することになっている。

以上のように、「日本語学入門」は、現代日本語の身近な諸現象について、主として社会言語学的あるいは文化論的な視点からの考察を行う語彙論や表現論に関する講義科目である。このような授業内容で当科目が目指すのは、教員による講義の他、司会担当、指定質問者も含めて受講者によるグループ要約・調査発表を通して、日本語による表現力を高め、適切なコミュニケーション能力を身につけることである。したがって、上述の“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”と齟齬は生じておらず、むしろ、両者の目指すところは極めて類似している。

“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”の国語学に関する領域／現代語については、本来、大学レベルの日本語学関係の授業を受講し、単位を取得できたならば、習得できるはずのものである。また、‘動詞の活用’‘話し言葉と書き言葉の違い’などの基本事項は、本来、教職志望の有無にはかかわらず、高等学校段階までに身につけておくべきものである。筆者の基本的な立場は、これら大学あるいはそれ以前の段階における日本語に関する基礎の上に、大学における高度な日本語学や専門的な国語科教育に関する授業が成り立つというものである。

一方で、関連する授業科目の中で、敢えて基礎学力を確認しつつ受講者を知的に刺激し、それを契機に学力のさらなる向上を目指すのは有効であると考ええる。

その意味で、特に教職志望の学生にとっては、高度な知識と技能を身につけ、将来教壇に立つためには、日本語学関係の授業を受講する前提として、日本語学に関する基礎学力は必要不可欠であり、また、授業を通じたその確認及び向上が望まれる。

そこで、以下、教員（国語）志望学生を中心に、一般学生も含めた受講者を想定した場合の日本語学に関する基礎学力の確認及び向上の方策について、新カリキュラムの「日本語学入門」という授業における実践を例に論じることにする。

II. 「日本語学入門」の授業運営と基礎学力の確認及び向上の方策

新カリキュラムの「日本語学入門」の授業運営について、以下、その概略を記しておく。筆者が担当するのは、第1回のオリエンテーションを含めて、前半の8回である。

第1回から第4回までの授業運営は以下の通りである。

「日本語学入門」は、形式上は講義科目に属するが、受講者によるグループ発表を中心に、演習的要素を取り入れている。全8回の中で、第1回のオリエンテーションから第4回までは、それぞれ、オリエンテーション（対象・授業運営・発表準備の方法等）、日本語文化に関する興味の確認・発表資料のサンプル提示（“他律他人（他者・集団主義）志向”）、日程及びグループの確認・担当参考調査資料の配布とグループ別準備計画の策定・対人及び社会意識としての他律他人（他者・集団主義）志向の考察、認識及び思考法としての非分析的思考（感覚志向）の考察・レポート作成方法を中心に講義を行う。特に、第3回及び第4回には、第5回以降にはじまるグループ発表の役割分担、司会・指定質問の担当者の決定、発表の準備などを行うことにしている。

第5回以降の授業運営は以下の通りである。

授業の最初に、まず、その日のテーマについて教員が15分程度で説明を行う。次いで、15分程度でグループ発表を行う。発表の内容は、配布した参考調査資料の要約（タイトル／調査者・主たる所属先／調査の動機・目的／資料の中の基本用語解説／調査の具体例及び考察の簡潔な記述／調査結果の背景にあるもの）、参考調査資料のテーマに関連した調査の結果と分析、両調査（参考調査及び関連調査）の結果から見えてくる日本人・日本社会についてのグループ構成員による個別コ

メントである。発表の前半は要約を中心とするが、必ず担当した参考調査資料の結果の背景にあるもの（調査者の見解）をまとめるようにしている。後半は、その見解を、新たな視点や他の具体例の収集による調査を行う中で検証すると共に、“日本人の精神空間”（自然・宇宙観／時間・空間意識／対人・社会意識／認識・思考法／道徳意識／美意識など）との関係について、担当者一人ひとりに気付きを記述・コメントするように求めている。

上述の“日本人の精神空間”は、筆者の研究テーマである“「気」の表現と文化”の研究成果^{注3)}に基づくものであり、第3回の授業時に、以下のような資料を【参考】として提示し、日本語に特徴的な「気」の表現の考察から得られた日本語文化論の一つの作業仮説^{注4)}として適宜説明を加え、受講者の発表に資することになっている。

【参考】日本人の根源的属性と6つの精神文化的特性

根源的属性：○融和的調整的他律志向

6つの精神文化的特性：

- ①自然観：○自然との一体化及び霊力信愛志向
- ②時間・空間意識：循環・再生意識及び場（時機・適切な場所）重視志向
- ③対人・社会意識：○他律他人（他者・集団主義）志向
- ④認識・思考法：○非分析的即物的感覚志向
- ⑤道徳意識：間人道徳主義・自己内修養志向
- ⑥美意識：陰陽バランス・○陰影志向

※○を付したものは、今回主として取り上げるテーマ

発表は毎回原則2組としている。各発表の司会は次回の発表者がそれぞれ前半・後半を担当し、また、指定質問は前回の発表者が2組に対して行うことにしている。質問等は、指定質問者以外にも自由にできる。また、発表の直後に約5分間の記録カードへの記入時間を設けて記入させることで、時間の関係上質問等ができなかった学生に対して次回にコメントを返したり、受講者の理解状況を把握して後に補足説明したりしている。さらに、時間に余裕がある場合は、受講者をグループ分けして、グループ内で記録カードの記述内容を読み上げ合い、情報あるいは意見の交換を行うことにしている。

質疑応答の最後に、学生の司会者が教員の筆者に講評を求めることになっている。筆者は、残り時間を勘案しながら、まず、発表資料や発表内容の批正を行った上で、発表者のコメントや考察内容を中心に講評を行う。発表内容によっては、次回に再度、補足説明、やり直し等を求めることもある。しかし、原則として前年度までの受講者の作成資料を渡すことにしており、それを理解した上で、それをしのぐ発表を求めることにしている。結果として、入学して間もない受講者ではあるが、概ね資料をよく整え、充実した発表を行う。

以上のような授業運営を行う「日本語学入門」において、筆者が受講生に対して基礎学力の確認及び向上の方策を実施するとすれば、授業最初のテーマに関する説明時、あるいは発表後の講評時が考えられる。

後者の時間に、適宜発表資料や発表内容に関連させて基礎学力の確認をし、向上を図ることも不可能ではない。しかし、入門的な授業とはいえ、専門基礎的な考察の確認をなすべき時間に、基礎学力に関するある程度まとまった指導をするのは授業全体のレベルの低下にもつながりかねず有効とはいえない。そこで、筆者は、可能な範囲で授業の最初にまとめて話題にしなが、受講者が発表で取り上げる上述の“資料の中の基本用語解説”に関連させるかたち^{注5)}で、適宜ある程度まとま

た基礎学力の確認を行うようにしている。その際は、特に、教員（国語）志望学生を念頭に、発表資料や発表内容に直接関連する事項を中心に、‘日本語学の専門基礎’が“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”の国語学に関する領域／現代語’になることに言及するようにしている。尚、時間的余裕がある場合には、発表後の講評を終えた後に、改めて適宜発表資料や発表内容に関連させて基礎学力の確認をし、向上を図ることは有効であると考えている。

Ⅲ. 「日本語学入門」における基礎学力の確認及び向上の方策の実際

ここでは、授業最初のテーマに関する説明時に行った基礎学力の確認及び向上の方策の実際を、第5回から第8回のそれぞれに分けて報告しておく。基礎学力に関する指導項目は、単独で取り立てて行うことはせず、当授業の目標の達成に資する範囲内で毎回2～3項目を適宜選定した。その際、上述の“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）と、対応する授業名（新カリ）”（2015年4月3日）における本科目（教職必修以外）の位置付け・役割を参考に引き上げた。指導は、時間的な制約を考慮し、受講者に基礎学力の重要性を気づかせ、自ら復習させることに主眼を置き、可能な限り簡潔に行った。

以下、第3回の発表資料のサンプル提示（“他律他人（他者・集団主義）志向”）及び5回から8回の発表資料のタイトルを〈 〉内に、ねらいを【 】内に示した上で、（ ）内にその回で受講生に配布した参考調査資料の中で結果的に扱われていた〈現代語〉についての基礎学力の確認及び向上に関する事項の中で主たるものと、その中から筆者が授業最初のテーマに関する説明時に基礎学力の確認及び向上のために指導項目として引き上げた事項の具体的内容を記す（下線部分）ことにする。

【第3回】〈「KY」発言の真意を探る〉【他律他人志向／言語行動：若者言葉】（若者言葉、「KY」（空気が・読めない）、「ND」（人間として・どうも）、その場の空気を盛り上げられる人への高い評価、多様化した人間関係、若者の「場」としての学校での交友関係とケータイメールの世界、中高生の意外に長けたコミュニケーション能力、状況・対人関係に応じた話の内容や言葉の使い分け、自分が属する場を居心地のよいものにするためのスキル、携帯電話で飛躍的に広がった交友関係をうまく渡り歩くためのスキル、仲間内の言葉、接尾辞としての「～系」「～的」「～気（げ）」、評価・意思・気分を和らげる効果、自分の意見の押し付けの回避、互いの心理的負担の軽減、面白さのアピール、「～とか」「～みたいな」「なんか」の多用、互いの気持ちへの配慮、表現の婉曲化、メールの世界、即レス（即レスポンス＝すぐ返信すること）、文末に使用される絵文字・顔文字、親密さを表す大きな要素、10分以内の返信をマナーとする即レス実行者、メール文末の記号、文末による自らの心情表現、句点で終る語尾から受信側が受ける冷たい印象、句点すらない語尾から受信側が読み取る相手の怒り、ケータイの作法、複雑な人間関係の煩わしさ、頻繁に届くメールに対するストレス、相手に応じた自分の上手な使い分け、多様な人間関係の前向きな受け入れ、若者のネットワークづくりへの強い執着心、先行きの見えない閉塞した時代、複数のグループ間を自在に渡り歩く若者、「KY」の出現とその若者言葉化／ケータイメールの世界・2字のローマ字省略語（KY語）の出現・若者言葉化）

【第5回】〈「そうなんです」 という相づち〉【他律他人志向／言語行動：相づち】（相づち、場面、話題、返答、話し相手、未知の話題、目上の人、セールスマンと顧客のやりとり、部下と上司が話すとき、

プロの話し手（アナウンサー・パーソナリティーなど）による使用、終助詞「か」「ね」「んです」（事情や理由を説明する表現）、「んです」＋「か」（上昇調）：事情や理由を相手に確かめたり問いただしたりする、「んです」＋「か」（下降調）：新たな情報を得て驚いた・納得した、疑問の意味を持つ「か」、相づち「そうなんですか」：相手に返事を要求するニュアンス・過剰な関心・大げさな応答、話し手と聞き手の情報の共有が必要な「ね」「んです」＋「ね」：話し手が予想したことについて何らかの証拠を得て聞き手に確認する（やっぱり思っていた通り／現段階でわかっている情報から推測すると）、相づち「そうなんですね」：あなたの話は前からわかっていた・予想していた・やっぱりそうでしたかというニュアンス：相手に対する返事の不強要と過剰な関心の無さによる話題転換の容易さ、相づち「そうなんですね」の大切なビジネス場面における有用性、応答表現、言語行動、非言語行動／終助詞「か」「ね」「んです」（事情や理由を説明する表現）及び相づち「そうなんですね」の有用性）／／〈「責任回避」は配慮の結果！？〉【他律他人志向／言語表現：「辞書形」表現】（「辞書形」表現、女子高生の言葉、「辞書形」と「タ形」（感情を示す機能）、責任回避のための戦略、70年代後半の流行語「なんちゃって」、人間関係を円滑にする効果、「私って～人じゃない？」、相手と意見が違ったときのための「責任回避」、「語尾上げ」の話し方、「～じゃないですか」、「語用論」の研究領域の一つとしての「ポライトネス（敬語より広い概念で、対人関係における調節機能）」の一例としての「責任回避」、Maxim of Agreement（人間関係をギクシャクさせない手段の一つとして“他者との意見の相違は最小限に、他者との合意は最大限にする”という工夫が行われる）、「責任回避」の表現としての「フツウに」（常識の範囲内で）の社会的で客観的な判断基準、「責任回避」の表現の進化形としての「超〇〇、ウケル」、「辞書形」で言い切るストラテジー／「語用論」・「ポライトネス」及び「辞書形」表現）

【第6回】〈方言話者の時代到来〉【他律他人志向／言語表現：方言の効用】（関西弁、お笑い芸人・アーティスト、方言、流行語大賞、首都圏の女子高生の間の方言ブーム、会話・メールでのやりとりでの各地の方言の組み合わせ使用、「なまら（北海道：とても）」、「せからしか（九州：いらいらする）」、心情を表しやすい副詞・文末詞、方言使用による温かみ・親密さの表示効果、出身地以外の地方方言の意識的使用による相手に配慮した言動、メールにおける顔文字・絵文字使用と同じ効果、積極的に方言使用を行う芸能人の増加、多様化する関西弁のイメージ、関西弁を広めた明石家さんま・ダウンタウン・ナインティナインなどのお笑いタレント、庶民的・お調子者の役柄が多いドラマの中での関西弁使用者、「関西弁＝面白い、親しみやすい」というステレオタイプ、関西弁のイメージのなかった一昔前の関西出身アイドル歌手、関西弁の持つ庶民的な印象を回避するための標準語の使用、関西弁を使用する現在の関西出身人気芸能人（タレント、実力派歌手など）の増加、若くてかわいい関西出身歌姫の歌番組などにおける奔放な関西弁の使用、「関西弁＝かっこいい、かわいい」の付加、関西ローカル番組か全国放送か・司会者が関西人か否かによる標準語モードと方言モードの使い分け、日常のくだけた場面で使用する方言、テレビなどの公の場で話す場合の改まった標準語の使用、あえて親しみを出すための方言使用、アナウンサー・俳優・日本語教師になる場合の方言話者のハンディーの有無、場面に応じた方言使用、方言を話せることの魅力、方言話者にとってのいい時代／方言と関西弁及び方言と標準語）／／〈「アホ」になるということ〉^{注6)}【他律他人志向／非言語表現：笑いの効用】（世界のナベアツ、ギャグ、数字カウントに関するネタ、「サン」発音時の声・表情の変化、ナベアツ流の「アホになる」手法、洗練されたエンターテイナーの風貌、「アホとなる」時の豹変振り、ギャグの内容のくだらなさど知的な数字ゲームに対応する聡明さのギャップ、デリケートな扱いを要する言葉としての「アホ」、「アホになる」時の様子、声質

(「サン」が「シャーン」聞こえるような口元筋肉の弛緩による発音の不明瞭化／高く大きな声／母音を長めにする発音), 表情(歪めた顔／むいた白目／大きく開けっぱなしにした口), 姿勢(ガニ股／開放的な感じを強調する大きく広げた手), 「アホ」を売りにした芸人, 往年の人気喜劇役者の藤山寛美(面白いメイクをした顔／独特のとぼけた話し方), 「アホの坂田」と称された坂田利夫(少し鼻に抜けたような声／ほんわかとした顔立ち／薄目を開けたような柔らかな目元／開き気味の口元／赤い頬／薄目の頭髪), 芸人としての貴重な特徴, 共通する「アホになるための要素」としての発音・表情・姿勢, 三つの要素の緩め・乱しなどによる巧みな操作, “愚かである” “知識や能力が足りない” という意味ではなく “場を和ませる” “愛すべき存在である” “面白い” といったプラスの意味合いの「アホ」, 「アホ」の要素が取り除かれる言語教育の世界, 母音・子音の明瞭な発音が望ましい音声教育, 表情・姿勢を大切にコミュニケーション, ナベアツ流「アホになる」技術による人間関係の円滑化の可能性, TPOに十分配慮したナベアツ流技術の言語教育への応用の可能性／笑いのメカニズム・効用及びその背景としての母音の操作と言語教育への応用の可能性)

【第7回】〈流行語ってどんだけ〜〉【非分析的思考／言語文化：流行語】(自由国民社『現代用語の基礎知識』, 「ユーキャン 新語・流行語大賞」, トップテン大賞を取った言葉, 選ばれた言葉の出所, 政治家やスポーツ選手の発言, 小説・テレビ番組・コマーシャル(CM), 大賞の隠された法則, 偶数年に選ばれるスポーツ関係の言葉及び奇数年に選ばれる政治関係の言葉, 大賞におけるCMからの言葉の回避, 2〜4年に一度のタレントの言葉からの選出, 第三者を描写するような言葉の回避／「ユーキャン 新語・流行語大賞」の舞台裏及び流行語のメカニズム)／／〈「ニホン」と「ニッポン」〉【感覚志向／非言語表現：音声の価値】(「日本」の読み方, 「日本」の正式な読み方に関する疑問, 「日本」が付く固有名詞の読み方に関する調査結果(「音訳の部屋」), 国立国語研究所の話し言葉研究, NHK放送文化研究所の「日本の国名の読み方」調査, 既に奈良時代に発音されていた「ニッポン」, 江戸時代に発音のはじまる「ニホン」, 文部省の臨時国語調査会による国名を「ニッポン」とする報告書のまとめ, NHKの審議会による国名としての「日本」の「ニッポン」という放送上の読みの決定, 常用漢字表における「日」の読み, 公的に信頼性がある読みとしての「ニッポン」, オリンピック前にテレビ番組のタイトルやCM・映画・本などの表題で多用される「ニッポン」という読み, 日本人の心理的側面の大きな反映, NHKの審議会による「日本」の読み方の発音上の印象分析, 「ニッポン」の印象(「若々しい・元気がある」「歴史的な発音」「対外的・国家的に改まった気分」「重く力強い感じ」など), 「ニホン」の印象(「現代的な発音」「内向きで家庭的, くだけた感じ」「軽く穏やかな感じ」「老成な感じ」など), 「日本」の読みの「文脈」「言いやすさ」「伝わりやすさ」による無意識の使い分け, 促音「ッ」を回避して「言いやすさ」から「ニホン」を選択する日本語学習者, 外国を意識することから「対外的」「国家的」なものを強調したくなるオリンピック前の風潮, 勢いや強調を感じさせる促音「ッ」, バーレーボール応援の「ニッポン・チャチャチャ」に感じられる若々しい力強さ／「日本」という国名の誕生とその読み及び促音「ッ」の音声的イメージ)

【第8回】〈語尾で個性を表現〉【非分析的思考(感覚志向)／言語表現：言葉遊び(語尾変化)】(語尾, 個性的表現, アイドルの言葉, 1日に何度も更新される中川翔子のブログ・コスプレ, 「しょこたん」と称される中川翔子, 「しょこたん語(中川翔子)」, 共通語による表現との比較, 「お」(だろう), 「ギザ」(副詞：とても), 「カワユス」(形容詞語幹+「ス」:可愛い+です), 「～ス」(形容詞語幹に続く「です」), 「～お」(終助詞：よ), 「～おね」(終助詞：よね), 乱用の回避と第三者の意味

理解のための表現の調整，文法的ルール，「文の構造を変えない」，「意味を持つ語（動詞や名詞など）はあまり変化させない」，読み手の理解のための配慮，文末の適度な独自性による個性の表現，語尾の向うに見える話し手，「のりピー」と称される酒井法子，「ノリピー語（酒井法子）」，「マンモス」（とても，～ます），「ラッピー」（幸せ），語尾にくる「ピー」（です），不思議系アイドルで「ゆうこりん」と称される小倉優子，「りんこ」（ます），話し手の属性を表す語尾の役割，アニメにおけるキャラクターの工夫の凝らされた言い回し／語尾の表現と話し手の個性及び形容詞語幹と終助詞）／／〈心に残るCMの言葉〉【非分析的志向（感覚志向），自然との一体化志向，陰影志向（余剰・情緒志向）／言語文化：テレビCMの戦略（ことば・映像・イメージ）】（最近のテレビCM，スポンサーが番組内に入れる1分程度の番組CMの減少，番組間に入る15秒程度のスポットCMの割合の増加，広告内容ではなくブランド認知を狙ったCMの増加，「銘柄別CM好感度トップ10（CM総合研究所調べ）」，ソフトバンクの最強CM「白戸家」シリーズ，登場するキャラクターの意外性，意外性の親しみやすさへの変化，ほとんどが商品情報である登場人物のセリフ，父親が白い犬という「インパクトCM」，「娯楽CM」への移行，「商品説明CM」としての機能の持ち合わせ，CM効果特性をほぼ取り揃えたCM作品，セリフとして言わせることで商品情報を受け手に自然に記憶させることに成功している「白戸家」シリーズ，セリフがエピソードとともに白戸家の人々の実像を見事に映し出しているCM，心惹かれるCM，CM高感度2位に挙げられたダイワハウスのCM，企業の特徴・理念（CI）のアピール，ブランドイメージを高めるための「情緒的CM」，「なんでダイワハウスなんだ？」シリーズとCI（Corporate Identity），日本人が心惹かれる「情緒的CM」，あらゆる効果特性を持ったCMによる携帯電話の熾烈なシェア争いでの勝ち残りを狙うソフトバンク，CM高感度と高いブランドイメージによって消費者が選択に時間を費やす住宅を売ろうとするダイワハウス，売り込む製品の特性やブランドの認知度に合わせた広告の表現パターンの変化，現代のCMにおける言葉の果たす役割，セリフ・ナレーション・キャッチフレーズなど様々な形での受け手の心への働きかけ／CM効果特性としての「インパクトCM」「娯楽CM」「商品説明CM」「情緒的CM」及びセリフ・ナレーション・キャッチフレーズなどでの様々な表現パターンを駆使する戦略としての言葉）

結果として，国語科教員になるための国語学（日本語学）の〈現代語〉に関連する事項は，筆者が担当している専門科目の「日本語研究Ⅰ」（2年次前期）と比較するならば，一部の語彙・音声に関するものや，常用漢字表といった一部の表記に関するものは別として，いわゆる文法については，文法的ルール，動詞，名詞，形容詞語幹，終助詞などの語は出現するものの，取り扱われているものは極めて少ない。原因の一つには，全15回に対してオリエンテーションを含めて全8回という時間的制約があるが，多くは，授業の目標の相違から生じる教材の違いによる。「日本語学入門」でテキスト代わりに配布する参考調査資料は，日本語学や日本語教育関係の専門家の執筆した比較的読みやすい割りに内容の濃い日本語に関する評論的な文章である。それに対して，「日本語研究Ⅰ」で取り上げる主たる教材は，日本語学研究の実際や最先端を実感してもらうために，筆者の執筆によるものを中心に，その他日本語研究者の論文である。その他，関連する文化論としては，最新の関連書籍を中心に扱うことにしている。後者が現代日本語の諸現象の学術的な分析・考察結果を記述することを目的としているのに対して，前者の「日本語学入門」の参考調査資料は，現代日本語の“身近な”諸現象とその背景に関する“気付き”を仮説的に提示するものであり，文法用語を中心とする学術的な専門用語は極力回避しながら書かれている。入学間もない受講生にとって，この“身近な”と“気付き”が，今後の本格的な学びの萌芽となることを意図した選択であり，国語科

教員になるための国語学（日本語学）の〈現代語〉に関連する事項と直接関連するものの取り扱いが少ない点は、前述の筆者の基本的な立場からは、大学レベルの授業内容としてむしろ望ましいと考える。したがって、仮に、国語科教員になるための国語学（日本語学）の〈現代語〉に関連する事項が、「日本語学入門」「日本語学研究Ⅰ」の両方に存在する場合も、授業の目標が違えば、その扱い方も異なることになる。「日本語学入門」における基礎学力の確認及び向上の方策は、自ずとそれにふさわしいものになる必要がある。

例えば、上述の第7回（5月末実施）の授業のテーマである“「ニホン」と「ニッポン」”については、促音の「ッ」が話題となっている。しかしながら、促音や促音便などについては、学校文法レベルでの音便現象としてのまとまった復習や、専門レベルでの体系的な学びや発展的考察は、少なくとも「日本語学入門」では行うべきではない。筆者の担当ではないが、専門レベルでの体系的な学びは「日本語概論」（1年次後期）の音声に関する授業の中で扱われるべきであろう。それよりも、入学間もない受講生が、グループ発表を通して人間関係を構築していきながら、その人間関係を切り結んでいく上での言葉の重要さを実感し、身近な日本語の諸現象の考察を通して知的好奇心を刺激され、高校までとは異なる日本語や日本語文化の世界について興味・関心を持てるようにすることが優先されるべきであろう。

専門基礎科目・専門科目の特性や時間的な制約などを十分に考慮する必要はあるが、教授者が“国語科教員に必要な知識と技能（学習指導要領の内容）”を意識しつつ、指導事項を整理・精選し、授業を工夫することで、国語科教員の基礎学力の確認及び向上は可能であり、むしろ、大学レベルの真の意味での基礎学力が身につくと考える。

Ⅳ. 受講生に対する基礎学力の確認及び向上の方策に関するアンケート調査

1. アンケート調査の概要

2016年前期に上述の「日本語文化入門」を履修した教員志望者^{注7)}も含めて、1年後の「日本語研究Ⅰ」（新カリ2年次前期）^{注8)}の受講者を対象に「基礎学力の確認及び向上の方策に関するアンケート調査」を実施した。

この「日本語研究Ⅰ」の第1回目の授業のオリエンテーションの中で、授業の中で“国語科教員の基礎学力の確認及び向上”も意識的に行うことを告知した上で、以後、実践を行った。その後、学期の中盤及び期末に、受講生に対する基礎学力の確認及び向上の方策に関する2つのアンケート調査を行った。目的は、〈アンケート調査①〉では日本語の文法を中心に受講生の自己の基礎学力への意識を調査することに、〈アンケート調査②〉では教員（国語）志望受講生に筆者の授業実践への意見・感想を求めることに置いた。日時・対象・方法・内容については、以下の通りである。

〈アンケート調査①〉

日時：2017年6月1日（第7回授業の開始時）

対象：「日本語研究Ⅰ」受講者61名^{注9)}

方法：授業コメントカード（記録カード）への記名式記述回答

内容：古典文法に関する知識と力／10品詞をはじめとする現代の日本語の文法に関する知識と力

質問項目：

I：古典文法に関する自分の知識と力について30～50字でコメントしてください。

II：10品詞をはじめ現代の日本語の文法に関する自分の知識と力について30～50字でコメン

トしてください。

※教員（国語）志望受講生は、教職への意欲・熱意を5段階（A：大変高い／B：まあまあ高い／C：普通／D：あまり高くない／E：大変低い）で記してください。

〈アンケート調査②〉

日時：2017年7月13日（第13回授業の終了時）

対象：「日本語研究Ⅰ」受講者の中の新2年生の教員（国語）志望者15名

方法：アンケート用紙（A4判1枚）への無記名式の選択及び記述回答

内容：教職（国語）への意欲・熱意／基本事項の復習をも意図して実施された授業（「日本語研究Ⅰ」）の役立ち度／基本事項の確認及び向上のための復習も意図して実施する授業に関する必要・不要論／1年生前期の「日本語学入門」の受講の有無

質問項目：

I：今現在の時点で、教職（国語）への意欲・熱意はどの程度ですか。

1～5の該当する数字に○を付した上で、その理由についてコメントしてください。

1：大変高い（A段階） 2：まあまあ高い（B段階） 3：普通（C段階）

4：あまり高くない（D段階） 5：大変低い（E段階）

II：「日本語研究Ⅰ」は教職（国語）の内容に関連する科目であり、習得しておきたい文法（品詞／活用形／動詞の活用の種類など）・語彙（和語・漢語・外来語／言葉の使い分け（男性語・女性語・賀詞）など）・表現（慣用表現／四字熟語／世代間の使用差など）を中心に、基本事項の確認・向上のための復習も意図して実施されましたが、どの程度役に立ちましたか。

1～5の該当する数字に○を付した上で、その理由についてコメントしてください。

1：大変役に立った 2：まあまあ役に立った 3：普通

4：あまり役に立たなかった 5：ほとんど役に立たなかった

III：大学の専門科目の中で、教職（国語）以外の一般学生も含めて、特に教員（国語）志望受講者を意識して、習得しておくべき基本事項の確認・向上のための復習も意図して授業を行うことについて、どう思いますか。必要・不要論を中心に、自由に記述してください。

IV：1年生前期に「日本語学入門」（前半：戸田／後半：刀田）を受講しましたか。

1：受講した 2：受講していない 3：今期2年生前期に受講中である

2. アンケート調査の結果及び考察

〈アンケート調査①〉

前期中盤の時期で、主として語彙・文法・意味・表現の観点から現代の「気」の表現について考察が終盤を迎え、今回は「気」の慣用表現の意味用法から日本文化を見る、さらにその次からは2回連続で「日本における「気」の表現と思想」がテーマとなる回の授業開始時に、古典文法に関する知識と力及び10品詞をはじめとする現代の日本語の文法に関する知識と力に関して、記名式の授業コメントカード（記録カード）へ、自己の状況を自由に記述するものであった。

この中で、特に教員（国語）志望受講者の代表的なコメントとしては、「古典文法」については、「中学、高校と習った内容はまだある程度記憶に残っている」といったものが、また、「現代の日本語の文法」については、「10品詞についての基本的知識はあり、全体として古典文法よりは理解できていると思う」などがあつた。

一方で、それぞれ「基本的な部分は理解しているが、発展的な部分は非常に弱い／古典文法に関

してはあまりくわしくないので、今後覚えなおしていきたい／古典文法はあまり自信がないので勉強しなおしていきたい」,「生活上で当然使っているが、文法知識に関してはあまり持っていない気がする／名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、連体詞、助動詞、助詞はすぐに頭に浮かんだが、感動詞と接続詞はすぐに思い出せなかった／品詞については独特の用法があるので、完璧とは言い難い」というように、苦手意識を持つ受講生もおり、全体としてはかなり個人差が見られた。

特に教員（国語）志望受講者には、教職への意欲・熱意を5段階（A～E）で付すことを求めたが、平均値は3.45であり、“普通（C段階）”よりは高い数値であった。総じて、教職への意欲・熱意のありようが現代の日本語の文法や古典文法に関する知識と力の十全さにも現れる傾向が見られた。

〈アンケート調査②〉

期末のまとめの時期に、大学の授業における教職（国語）を意識した基本事項の確認及び向上のための復習のあり方に関して、特に教員（国語）志望受講者を対象に、無記名式のアンケート用紙を用いて、質問項目に対して選択肢から選ぶと共に自由に記述するものであった。

質問項目Ⅰは、約40日前のアンケート調査①でも行ったもので、教職への意欲・熱意を、5段階（A～E）から選択するものであったが、15名の平均値は3.47であり、調査①の数値より0.02高かったが、ほぼ同じ数値であった。“普通（C段階）”よりは意欲・熱意の高い受講生が集まり、教職への意志を集団全体として持続していた。一方で、調査①の段階と同様に、少数ではあるが“あまり高くない（D段階）”“大変低い（E段階）”という段階の教員志望受講生もおり、“国語科教員の基礎学力の確認及び向上”の必要性と共に学力の多様性ゆえのその実現の困難さを改めて認識させられた。

質問項目Ⅱは、基本事項の復習をも意図して実施された授業の役立ち度を、5段階から選択した上で、理由について自由に記述するものであったが、15名の平均値は3.40であり、まずまずの数値であった。“あまり役に立たなかった”と3名がややマイナスの評価をしたが、質問項目Ⅰの内訳は、B段階が1名、C段階が2名であった。筆者としては、大学レベルの授業内容の中で、結果として基本事項にふれるようにさせると共に、講評時にいくつかの項目を取り立てて話題にしたにすぎないが、教員志望受講者には全体としては役に立ったようである。採用試験に合格し、教壇に立つための教職（国語）の学びは、まずは、授業者と受講者の双方が基本事項を意識化すること、その上で大学の通常の授業を協働しながらつくりあげていくことで具現化しうるものと考えている。

質問項目Ⅲは、基本事項の確認・向上のための復習をも意図して実施する授業について、必要・不要論を中心に、自由に記述するものであったが、「単なる復習ではなく、大学レベルの専門的な学びに必要な十分な事項を中心に学ぶという前提ならば、大いに必要であり、また有用である」という内容の記述が多く見られた。総じて、実践そのものに対しては、好意的な結果であった。一方で、質問項目Ⅱで“あまり役に立たなかった”とした教員志望受講生のコメントには「必要ではあるが、大学の学びの本質はそこではない」「本格的な復習であったならばありがたかったと思う」といったものがあった。質問項目Ⅰの意欲・熱意に関しては、前者がB段階、後者がC段階であった。アンケート調査①で、総じて、教職への意欲・熱意のありようが現代の日本語の文法や古典文法に関する知識と力の十全さにも現れる傾向が見られた点も考慮するならば、ここからは、知識と力の程度差が、基礎学力の確認及び向上の方策に対して求めるものの差となって現れることがわかる。すなわち、高い意欲・熱意が知識と力の十全さを生み出し、さらに、大学の学びの本質に準拠した授業を求める結果、基本事項の確認・向上のための復習は不要とする一方で、意欲・熱意が必

ずしも高くない場合は、知識と力の獲得への意欲も中途半端なものになり、結果的にとりあえず授業内における本格的な復習に期待し依存しようとする傾向が見受けられる。また、そもそも意欲・熱意が低い場合は、復習そのものへの動機付けがなくなることになる。もっとも、3セメスター（2年次前期）の段階では、一般に明確な進路決定を行いきれないのは無理からぬことであり、特に教職となると相当の決意と努力を要求される点で、逡巡する学生がいるのは事実である。しかしながら、基本事項の復習への意識が高いものとならない状態で放置するのは回避すべきである。その点で、授業では、目的志向性の高い学習の功罪を見極めると共に、大学レベルの基礎学力の確認・向上を目指すべきであろう。

質問項目Ⅳは、本コースにおいて選択科目として“教科に関する科目”に設定されている「日本語学入門」を履修した上で、同様に選択科目である「日本語研究Ⅰ」を受講しているか否かを確認するものであるが、15名全員が1年前に既に受講していた。したがって、今回のアンケート調査の結果は、本稿で扱った2016年前期の実践を前提としたものになることを確認しておきたい。

V. おわりに―国語科教育と「日本語学入門」―

本稿では、基礎学力の確認及び向上の方策に関して、2016年前期「日本語学入門」の実際の授業の中でその具体的な方策を試験的に実施し、また、その受講学年への2017年前期「日本語研究Ⅰ」において実施したアンケート調査を通して受講生の意識や意見を考察した。方策を構じるにあたっての留意点として、以下の4点を指摘しておく。

- 1：日本語は日本文化の表層文化ではあるが、日本人≒日本国≒日本語という特殊な環境において、日本文化の中核的存在となっているという事実を伝えること
- 2：日本文化の中核的存在である日本語は、独自の日本語文化を形成する中で“日本語”と共に“国語”という概念を創出し、結果として「日本語教育」とは異なる「国語教育」「国語科教育」という言葉と内実を生み出してきたことを確認すること
- 3：〈現代語〉に関しては、入学間もない受講者の日本語に対する興味・関心を刺激することを念頭に、現代日本語学に関する身近な諸現象を内容重視で考察する中で、〇〇語（例：標準語・地域語（方言））、〇〇言葉（例：若者言葉・女子高生（の）言葉）、〇〇表現（文末表現・婉曲表現）などの語彙論、表現論に関する専門基礎用語を中心に、無理のない範囲で扱うこと
- 4：文法に関しては、文末表現（辞書形・終助詞など）、語幹、音便など、基礎的なものを中心に話題とし、古典文法とも密接に関連するいわゆる活用の種類や活用形などに関しては、主として「日本語研究Ⅰ」（2年次前期）の中^{注10)}で扱うこと

本稿では、日本語文化コースのカリキュラムにおいて〈日本語学〉の系統の授業科目に位置付けられている「日本語学入門」を取り上げ、〈現代語〉を中心に、国語学（日本語学）関係の基礎学力の確認及び向上の方策について考察した。大学の一般的な授業科目、ましてや専門科目に関する基礎学力についての筆者の基本的な立場は、高等学校段階までに習得しておくべきものであるというものである。教員（国語）志望者の基礎学力に関しても同様である。しかしながら、上記の1～4の点に留意し、敢えて大学の専門科目の中で基礎学力を養うならば、それは特に教員（国語）志望学生にとって極めて有意義であると考えらる。

先述した通り、この授業には独自の目標が設定されている。これらの目標に近づこうとする過程の中で、基礎学力が結果的に確認され、また向上していくことが期待される。そのためには、授業者が、個々の専門分野や個人の研究の特性を活かしながら、基礎学力の重要性について学生に意識

的に“気づき”を与え、また、大学レベルの視点から受講者の基礎学力を知的に刺激することからは始めるのが有効である。筆者としては、その出発点として、教職に関係する国語学（日本語学）系の1科目であり、入学間もない学生が、はじめて“日本語学”という専門の世界に出会う「日本語学入門」において、基礎学力の確認及び向上のための方策という視点から、今後も実践を続けていきたい。

注

- 1 新カリキュラムでは、卒業後の進路を意識したディプロマポリシーに基づいて、カリキュラムポリシー及びアドミッションポリシーが設定されることになった。
- 2 「日本語学入門」は、教育課程表と合わせて掲載されているカリキュラムマップには、〈日本語学〉の系統（日本語学入門（1年次前期）⇒日本語概論（1年次後期）⇒日本語研究Ⅰ（2年次前期）⇒日本語研究Ⅱ（2年次後期））の中の科目として位置付けられている。
- 3 現時点での到達点は、戸田（2016a）にまとめている。「日本語学入門」（1年次前期）では【参考】として紹介する程度にとどめている。一方で、「日本語研究Ⅰ」（2年次前期）では、研究成果を中間及び期末のまとめとして活用している。
- 4 戸田（2014b）のP204～205参照。
- 5 参考調査資料の中の基本用語は、“受講者全体が資料を読み進める上での理解に供する”ことを目的に、一定の条件に従いながら発表グループの判断で選定される。具体的な条件は、言語学（含む日本語学）に関する用語や固有名詞などを中心に、3項目以上を取り上げ、それぞれ60字程度で自分の言葉で簡潔にまとめるというものである。したがって、言語学（含む日本語学）に関する用語が必ずしも選定されるわけではない。その場合、授業最初のテーマに関する説明時の段階で筆者が取り立てて用語の解説を行うことにしている。また、併せて関連する項目について適宜言及することになっている。
- 6 参考調査資料のタイトル及び本文で使用されている表現である。ここでは“「アホ」になる”は、「アホ」がカッコ付きとなった上で、慣用表現の形式で使用されており、配慮がなされている。意味としても、本文中の説明では、“デリケートな扱いを要する言葉”であることが言及された上で、必ずしもマイナスイメージではなく、むしろ“場を和ませる”“愛すべき存在である”“面白い”といったプラスの意味合いで扱われている。
- 7 2016年前期の「日本語学入門」の受講生は68名であった。2017年前期の「日本語研究Ⅰ」を受講した15名の教員（国語）志望学生全員が、1年前にこの「日本語学入門」を受講していた。
- 8 授業内容は、一部変更はあるものの授業内容は基本的に2016年度の「日本語研究Ⅰ」と同じである。詳細は、戸田（2017）参照。
- 9 当初の履修者名簿には88名が登録されていたが、アンケート調査②の時点で13名が途中で受講を取りやめており、受講者総数は75名になっていた。アンケート調査①の当日は14名の欠席があり、75名中の61名が回答したため、回答率は81.3%であった。
- 10 例えば「日本語研究Ⅰ」（2年次前期）では、「学校文法」の利点やその整合性への批判、“可能”の意味の弁別のための文法現象として見た場合の「ら抜き言葉」の合理性など、国語科教育に直接関わる内容に言及することになっている。

参考文献

赤祖父哲二・川合康三・金 文京・斎藤武生・ジョン ポチャラリ・林 史典・半沢幹一（2000）『日・

中・英言語文化事典』マクミラン ランゲージハウス

赤塚行雄（1974）『「気」の構造』講談社

（1990）『「気」の文化論』創拓社

飛鳥資料館（2011）『星々と日月の考古学』飛鳥資料館

林 八龍（2002）『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究—身体語彙慣用句を中心として—』明治書院

江刺正吾・小椋 博（1994）『高校野球の社会学—甲子園を読む—』世界思想社

榎本博明（2017）『「おもてなし」という残酷社会 過剰・感情労働とどう向き合うか』平凡社

岡田芳朗・伊東和彦・後藤晶男・松井吉昭（2006）『暦を知る事典』東京堂出版

小倉紀蔵（2011）『韓国は一個の哲学である〈理〉と〈気〉の社会システム』明治書院

帯津良一（1994）『あなたを健康に導く「生命場」の法則』東洋経済新報社

垣内景子（2015）『朱子学入門』ミネルヴァ書房

木村 敏（1972）『人と人との間—精神病理学的日本論—』弘文堂

（1994）『心の病理を考える』岩波書店

（2006）『自己・あいだ・時間 現象学的精神病理学』筑摩書房

小島 毅（2006）『近代日本の陽明学』講談社

田中春美・田中幸子（2015）『よくわかる社会言語学』ミネルヴァ書房

土田健次郎（2014）『江戸の朱子学』筑摩書房

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 第1巻』くろしお出版

（1984）『日本語のシンタクスと意味 第2巻』くろしお出版

（1991）『日本語のシンタクスと意味 第3巻』くろしお出版

豊嶋泰國（1999）『安倍晴明読本』原書房

中村 明（1993）『感情表現辞典』東京堂出版

中村桃子（2007）『〈性〉と日本語 ことばがつくる女と男』日本放送出版協会

芳賀 綏（2004）『日本人らしさの構造』大修館書店

（2007）『日本語の社会心理』人間の科学新社

藤川隼人（2012）『万葉集歴史物語』鳥影社

堀江貴文（2014）『刑務所なう。完全版』文藝春秋

前林清和・佐藤貢悦・小林 寛（2000）『〈気〉の比較文化：中国・韓国・日本』昭和堂

宮地 裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院

森山公夫（2014）『躁と鬱』筑摩書房

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社

（2009）『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版

山本七平（1983）『「空気」の研究』文藝春秋

湯浅泰雄（1986）『気・修行・身体』平河出版社

（1991）『「気」とは何か：身体が発するエネルギー』日本放送出版協会

湯浅吉美（2009）『暦と天文の古代中世史』吉川弘文館

戸田利彦（1994 - 1998a）「日本語慣用表現に関する研究（I）～（V）」『教育学研究紀要』第40 - 44 第2部 中国四国教育学会

（1998b - 2009）「「気」の慣用表現に関する研究（I）～（XI）」『日本語文化研究』第1 - 11 日本語文化学会（日本語文化専攻・コース）

- (1999)「精神的作用に関わる「気」を構成要素に持つ慣用表現の意味分類」(『日本語教育学の展開』奥田邦男先生退官記念論文集刊行委員会 溪水社)
- (2014a)「「気」の日本語文化論(Ⅰ)―「気」の表現に見る文化論的特徴―」(『比較文化研究』No.113, 日本比較文化学会)
- (2014b)「「気」の日本語文化論(Ⅱ)―メランコリー系の「気」の表現に見る文化論的特徴を中心に―」(『比較文化研究』No.114, 日本比較文化学会)
- (2016a)「「気」の日本語文化論(Ⅲ)―「気がふさぐ」の意味用法に見る文化論的特徴“「気ふさぎ」の構造”を中心に―」(『比較文化研究』No.124, 日本比較文化学会)
- (2016b)「国語科教育と日本語文化研究(Ⅰ)―“「気がふさぐ」の意味用法”の扱いを中心に―」(『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第2号, 比治山大学・比治山大学短期大学部)
- (2017)「国語科教育と日本語文化研究(Ⅱ)―「日本語研究Ⅰ」における国語科教員基礎学力の扱いを中心に―」(『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第3号, 比治山大学・比治山大学短期大学部)